

2022年7月

本と読書

心豊かに生きる

坂井 伸生

私は、本を読んだ後の余韻が好きです。温かく優しい気持ちになることもあれば、胸がしめつけられるような寂しさを覚えることもあります。本の余韻にひたる静かな時間、これが、私に心の安らぎと前に進む力を与えてくれます。

小学生の頃『泣いた赤鬼』を読み、何かやりきれない辛い気持ちになった事を覚えています。成瀬くんという友だちが、名古屋に転校していった時期も重なり、青鬼の書いた「ボクハ キミヲ ワスレマセン サヨウナラ」の手紙の言葉に、二度と



彼に会うことができないうような切ない気持ちになりました。素朴な言葉が心地よく、子どもたちに読み聞かせたい本です。

中学生の頃読んだ『銀河鉄道の夜』にも、孤独感や寂しさを感じましたが、銀河鉄道で出会う人たちについて想像をふくらませたり、言葉の意味をかみしめたりすることで、温かく優しい気持ちにもなれた気がします。この本の魅力は「月長石でも刻まれたような、すばらしい紫のりんどうの花が咲いていました」のように、きれいでわかりやすい情景描写の美しさです。物語は、きらきらした美しい世界を描く一方で、人間の死を見つめさせるので、大切なことに気づかせてくれたり、生きることを考



えさせたりしてくれます。今も私が、何度も読み返すことがある本です。

大学生の頃は、自分の生き方を探っていました。

新田次郎の小説に夢中になり『孤高の人』を読んだ時の感動を、今も覚えています。私は、自分の生き方を見つけられず、日本の山々の美しさに魅かれ、日常を忘れ、無心になれる山行を重ねていました。山岳小説というだけではなく、若者の孤独や葛藤を切実に描いた、情感溢れる青春小説にわが身を重ねた時期でもあります。



小説などで、自分の生きている世界から距離を置き、純粹に他人の思考をたどること、また、登場人物の姿や場面に、想いを巡らせ自分色に自由に描けることも、映像のない本の魅力です。本を読むことのよさや価値のとらえ方は、千差万別ですが、私は、今まで目にしたことがない文字や言葉と出会い、その響きや成り立ち、意味を味わうことも楽しみの一つにしています。

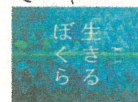
教師という職に就いてから、重松清の小説は、子どもたちに寄り添うことの大切さを教えてくれました。『ビタミンF』には「修一は、つま先を見つめてきびすを返し、いきをひとつついて、ゆつくりと歩き出した。」という一文があり、



「きびすを返す」の言葉が気になり、辞書で調べるのですが、読書によって、日本語の美しさや巧みさになれることもよくあります。作者は、他の作品でもこの言葉を用いることがあり、お気

に入りの言葉の一つと推測しています。

親の介護が始まり、孫が生まれてから、原田マハの『生きるぼくら』を読みました。引きこもっていた主人公が、家を飛び出し、米づくりや人のぬくもりにふれ、人生が大きく変わっていく物語です。歳を重ねてから分かってくることも



あります。生きるということとは、自分のためだけでなく、家族や祖先といった自分を生んで育ててくれた人たち、これから生まれてくる人たち、または、あらゆる社会の人たちとのつながりのために生きることでもある。

本を読み、想像力や言葉の力をも身に付けることは、考える力や相手の気持ちをくみ取る力、ひいては周りの人を思いやる心にもつながります。テレビやスマホ、ゲーム機が幅をきかせる今だからこそ、本とのふれ合いを大切にしたいものです。もちろん読書だけでなく、映画や音楽、芸術作品に触れる機会も大切です。なぜなら、感性を磨き、心を豊かにしてくれるからです。

読むことは、見ることに比べて、聞くことよりも積極的な行為です。本を読むきっかけに理由はいろいろあります。自分と向き合う習慣として読書があれば、人生が豊かに広がっていきます。今を生きている子どもたちにも、豊かな人生を歩んで欲しい。

新たな出会いに心躍らせながら…

坂井さんは、現在富加町の教育長さんとして子どもたちの未来を支えてくださっています。

読書タイム



絵本で親子のふれあいを・・・

中部国際医療センター北側にある健康プラザ内に開設した子育て支援施設「にじいろ広場」は、0歳から3歳の乳幼児を中心として、毎日多くの親子さんが子育て相談や子どもの遊び場として利用されています。毎月、季節の遊びや赤ちゃん体操、おはなし広場等の行事が定着し、市の子育て支援施設として軌道に乗ってきました。施設内に、大型遊具や月齢に合わせた玩具のほか、絵本コーナーを設置したところ、お母さんの膝の上で、興味津々に絵本を見るお子さんの姿を見かけるようになりました。お母さん方からは「親子のふれあいのひとつとして、寝る前に読んでいます」「動物が出てくる絵本を喜ぶのでよく読みます」という声の他に、「絵本のイラストを目で追うようになりました」「絵本を見せると声を出します」と、乳児ならではの成長の姿がわかる微笑ましい話も耳にします。

また、お父さんにとっても、読み聞かせが子どもと触れ合うよいきっかけになっているようで、絵本が子育て世代の皆さんにとって身近な存在であることを感じます。

しかし、スマートフォンやタブレットなど、SNSが見られる機器が生活には欠かせなくなっている今、親子のふれあいが減少してきていることも事実です。「絵本よりも動画を見せよう」という家庭も少なくありません。

施設では、職員が大型絵本や紙芝居の読み聞かせをする「おはなし広場」を開催しています。乳幼児のお子さんは、音に関する言葉やリズムがあるもの、繰り返しの内容の絵本に反応が良く喜ぶので、「だるまさんシリーズ」「いないいないばあ」

が人気の作品です。大人も「一緒に楽しむ」という感覚で、日常生活の中に親子の時間として絵本の時間を取り入れてもらえたら嬉しく思います。



にじいろ広場



「カッパのぬげがら」 なかがわちひろ/作・絵
理論社 ¥1,320



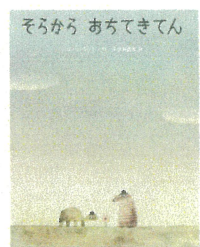
ある夏の日、ゲンタは川でカッパに出会った。どうやら、カッパは数がへって一人ぼっちになったらしい。さみしそうなカッパのために、ゲンタは仲間になることに…。100年に一度だけ脱皮をするカッパのぬげがらを着ると、カッパになれるんだって?! ワクワドキドキとちょっぴり切なさも味わえる一冊です。

物語



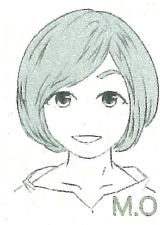
この本読んでみて!

「そらからおちてきてん」 クレヨンハウス
ジョン・クラッセン/作 長谷川義史/訳 ¥2,420



この絵本のおそろしさをどうお伝えしたらよいのでしょうか (≧▽≦)
カメ&アルマジロ&ヘビのゆる〜い関西弁の会話とまったりとしたイラストが繰り広げる壮大な SF とのギャップがすごい!
そらからおちてきたのは、いったい何か?!
子どもも大人もシュールな世界をぜひ楽しんで☆

えほん



「子どもから話したくなる「かぞくかいぎ」の秘密」

玉居子泰子/著 白夜書房 ¥1,650



家族は対話が大事とわかっていても、案外うまくいかないものです。きっかけがあれば…という方へ「かぞくかいぎ」を開いてみませんか? 共通しているのは、親も子も話を聞いてもらえると嬉しい、ということ。ご家庭にあったやり方で、楽しくチャレンジしてみませんか?

大人むけ



「天邪鬼な皇子と唐の黒猫」

渡辺仙州/著 ポプラ社 ¥1,650



中国からやってきた人語を解する「オレサマ黒猫」と、猫なんか好きではないと言いつつも「ツンデレ皇子」(宇多天皇)の、スリルあり笑いありの楽しいお話。宇多天皇は日記「寛平御記」を書いた実在の人物です。歴史も知りたくなる本! 読書の幅が広がります。

小説



このコーナーで本を紹介しているのは、市内の学校司書3人と東図書館司書です。